優秀賞論文要旨

男と女の間には

梁木　あゆ美

男女の性別境界線はこれまで様々な力でヒトの歴史に関わってきました。時には大いなる魅力を放ち、人を苦しめ、また癒し。そのたびに絶大な力を得てきたのです。

今、20世紀世紀末をむかえ、21世紀は性ボーダレスの時代の到来とされていますが、本論文はこの性別境界線について様々な視点から考察することで、これからのヒトと境界線の在り方について述べたものであります。

魅惑的な男装の麗人が活躍する「ベルサイユのばら」「十二夜」「とりかへばや物語」「ムーラン」などの物語りは、必ずと言っていいほど同じ話形を踏み、一つの共通点を備えています。女でありながら男装をし、当の男性たちより強さとカリスマを合わせ持つ主人公たち。そしてこれらの物語が古くは平安時代に既に文学としてかかれ、また海外ではシュイクスピアがこの話形を好み、さらに現代においても色褪せる事なく語られているとなれば、境界線の狭間に立ちはだかるこの麗人たちが伝えるものは「男性装は境界線を破壊している」のだと考えてしまうかもしれません。しかしすべての物語においてこの麗人たちが最終的に女性を選び取ったとき幸せな結末を手にいれるとなれば、「異性装は境界線を強固にしている」と言えるのです。

また、1999年埼玉医科大学総合医療センターで日本で初めて性同一性障害が病として認められ正式な性転換手術が行われました。このことはこれまで心の性よりも大きな力を持っていた生物学的性がここにきてその力を弱め、心の性に優先されたことを表しています。がしかし、やはりこのことも短絡的に境界

線が破壊されていると考えてはいけません。なぜなら、性別の境界線に苦しめられている彼ら性同一性障害者たちが誰よりも境界線を必要としているからです。手術によって自分の心に合う正しい体を手にいれたこの女性の次なる望みは戸籍上も男性となることです。彼らは男女の間には明確な境界線が存在するといいます。そして彼らは境界線によって正しく分類されることで癒されているのです。境界線にまつわる様々な出来事はこれまで教え切れないほどあり、それらは私たち人間の境界線への飽くなき挑戦と言えます。そのすべてにおいて境界線は一見破壊されつつあるかのようですが、実際は歴史とともにその力が強大になっていくばかりです。そして、更なる問題として、人間には男女のどちらにも分別できない第三の性が存在します。しかし、今彼らは無理やり性二分法の秤にかけられています。男女には明確な境界線は存在しません。しかしそこにはグラデーションが存在し、また境界線を破壊することもできないのです。それでも彼らのためにも21世紀が本当の意味での性ボーダレス時代の幕開けとなるように私たちは境界線に囚われない生き方を、すべての人がそれぞれの性を生きていける時代を築くため努力を続けなければならないのです。